

書評

上垣彰・田畑伸一郎(編著)『ユーラシア地域
大国の持続的経済発展』(ユーラシア地域大国論1)

京都: ミネルヴァ書房、2013年、268頁、4500円+税、ISBN9784623066179

唐亮・松里公孝(編著)『ユーラシア地域大国の
統治モデル』(ユーラシア地域大国論2)

京都: ミネルヴァ書房、2013年、328頁、4500円+税、ISBN9784623066407

岩下明裕(編著)『ユーラシア国際秩序の再編』

(ユーラシア地域大国論3)

京都: ミネルヴァ書房、2013年、240頁、4500円+税、ISBN9784623067817

望月哲男(編著)『ユーラシア地域大国の文化表
象』(ユーラシア地域大国論6)

京都: ミネルヴァ書房、2014年、274頁、4500円+税、ISBN9784623070312

宮本隆史

本書評では、ミネルヴァ書房より刊行中のシリーズ「ユーラシア地域大国論」より、第1巻の上垣彰・田畑伸一郎編著『ユーラシア地域大国の持続的経済発展』、第2巻の唐亮・松里公孝編著『ユーラシア地域大国の統治モデル』、第3巻の岩下明裕編著『ユーラシア国際秩序の再編』、第6巻の望月哲男編著『ユーラシア地域大国の文化表象』を紹介する。今後、近代帝国の崩壊・再編過程と世界システムの歴史を論じる第4巻『ユーラシア近代帝国と現代世界』と、国家の輪郭と越境というテーマについて論じる第5巻『越境者たちのユーラシア』が刊行予定である。

以下、シリーズの問題構成を確認したうえで、南アジア研究に関係が深い部分について紹介し、最後に各巻の連関について考察する。ただし、評者は執筆時点で未刊の2巻を手にすることができていないため、シリーズ全体について十分な理解ができていない可能性がある。また、本シリーズの書かれた目的は、中国・インド・ロシアというユーラシアの三つの大国の比較と関係の解明にあるのであって、南アジア研究に関連する部分を重点的に紹介することは、本来意図された読み方ではないだろう。これらの点について意識しつつも、掲載誌の性格を考慮してこのような内容にした。

シリーズ全体としては、中国・インド・ロシアという「地域大国」の

相互間、それら地域大国と欧米や日本が作ってきた世界秩序、そして周辺地域や中小規模の国との関係を明らかにすることが目的とされている。その際に、中長期的な変化を重視するという時間的な枠組みと、越境的な人の動きやそれぞれの国の相互認識・表象に注目するという空間的な枠組みが設定されている。こうした枠組みを基本としつつ、経済・統治・国際関係・歴史・社会・文化というテーマの切り分けがなされている。

各巻では、それぞれの編者による巻頭論文で問題が整理されており、全体を俯瞰しやすい構成となっている。経済をテーマとした第1巻では、経済発展の持続可能性の検討を中心的な課題としており、マクロ経済構造の比較を行なったうえで、制度的要因、社会的矛盾、エネルギー・環境問題などと経済発展との関係を分析している。統治をテーマとした第2巻では、比較分析を行なうことで、統治モデルが自由化・民主化および経済成長に与える影響を論じる一方で、経済モデルが政治社会の変化に及ぼす影響を分析する。第1巻と第2巻は、密接した問題関心の下に執筆されており、相互に補完しあうものとして読むことができる。一方で、国際関係をテーマとした第3巻は、比較の視点より相互関係の検討に重心を置いている。ユーラシアをひとつのアリーナとして想定しつつも、三つの地域大国がこのアリーナを超えた国際政治に関与する様子を示している。第2巻で取り上げられた、国家を単位とした統治の問題に、外枠を与える議論として接続している。文化をテーマとした第6巻では、文化表象・認識や思想的連関などについて議論が行なわれている。

第1巻『ユーラシア地域大国の持続的経済発展』では、ほぼ全ての章が中国・インド・ロシアの3国すべてを対象に比較と関係の検討を行なうという形式をとっている。第I部では、マクロ経済動向に関する検討が行なわれている。第1章の田畑伸一郎は3国が外貨準備を蓄積したためにグローバル・インバランスに影響を与えたことについて、第2章の上垣彰は工業化の条件と課題をまとめている。続く第II部では制度的要因についての分析が行なわれる。第3章の金野雄五・丸川知雄は、三つの地域大国の対外開放政策の比較を行ない、特に自由化後の幼稚産業保護について論じている。第4章の加藤篤史・佐藤隆広は、3国の製造部門に注目し、ビジネス環境が企業のパフォーマンスにどう影響しているかを考察している。第III部では、労働市場と格差という社会矛盾の

側面に光が当てられている。第5章の佐藤隆広は労働市場問題を分析しており、第6章の星野真は地域経済格差について産業集積と人口集中に注目しつつ論じている。第IV部では、エネルギー問題・環境問題が議論されている。第7章の本村真澄・細井長は、石油の産出国としてのロシアとサウジアラビアの市場政策、その輸入国としての中国とインドのエネルギー政策との関係を論じ、各々が利益を最大化するためにいかなる駆け引きを行なっているかを明らかにしている。第8章の堀井伸浩は、中国とインドのエネルギー源として主要なものとなっている石炭の供給に注目し、そのボトルネックとそれへの両国の対応を検討している。第9章の亀山康子は、環境問題として気候変動に注目し、三つの国がそれぞれ経済成長を目指し独自の政治的環境を持つために、温室効果ガスの削減に向かいにくい状況を説明している。

第2巻『ユーラシア地域大国の統治モデル』では、基調とする方法として比較分析が前面に出されている。第I部のふたつの章は、中国とロシアの政治経済移行期の分析をしており、南アジアは主要な検討の対象にはなっていない。国家統合と政党制に注目する第II部では、まず第3章の三宅康之が、中央と地方の財政関係の変化と国家統合の関係を論じ、3国とも計画経済から財政連邦主義的枠組みに移行することで、地域間格差を解消し国家統合を維持する方向に向かったことを論じている。第4章の大串敦・安達裕子は、統一ロシア党、中国共産党、インド国民会議派という政治的安定に寄与してきた支配政党を比較する。インド国民会議派が弱体化したのは、インディラ・ガーンディー政権以降に中央集権化が進んだことにより、柔軟性と分権性を失い地方エリートの離脱を招いてしまったためと指摘している。第III部ではガバナンスの問題が論じられる。第5章の田原史起・松里公孝は、農村部の公共生活が組織化されているメカニズムについて3国を比較している。インドについては、コミュニティと市場の果たす役割が弱く、多党制下の競争的選挙の構図の中でパトロネージが発生するため、選挙区への利益誘導が促されると説明している。続くふたつの章は、中国とインドを比較分析している。第6章の光磊は、土地紛争とそれへの地方政府の対応について論じ、中国においては中央と地方の政府の間の垂直的な説明責任の力学が農民の抗議活動を引き起こすのに対し、インドでは農村社会が政党政治化されていることが紛争の要因としている。第7章の任哲・三輪博

樹は、出稼ぎ労働者のガバナンスの問題に注目し、中国では労働者の保護が重要な課題とされているのに対し、インドでそれを具体的な政策にしにくい要因を説明している。アイデンティティの問題を取り上げた第IV部では、まず澤江史子が、政教関係に国民統合と民主的価値の緊張が反映されているトルコとインドを比較し、政治的争点と化した宗教問題を解決するには、その処方箋を世俗主義に求めることはできず、社会の矛盾を最小化する政教関係のパターンをプラグマティックに模索する他ないと主張する。第9章では松里公孝・中溝和弥が、各民族に一定の地理的領域を割り当て、中央に対して主権の一部を留保する下位政府を形成させるという、民族領域連邦制の観点から中国・インド・ロシアを比較検討し、その歴史的意義を明らかにしている。

第3巻『ユーラシア国際秩序の再編』は、ユーラシアの三つの地域大国間およびアメリカとの関係を中心に、冷戦期以降の国際関係を論じている。この巻では、先行するふたつの巻と比べてときに、比較の視点よりも相互関係に大きな関心が向けられているのが特徴である。第I部は冷戦期に注目し、この時期に国境をめぐる問題を軸に地域大国としての自己規定と相互関係が生まれたことを示している。第1章のディヴィッド・ウルフは、冷戦初期の歴史を再検討し、中国・ソ連の外交関係にインドの存在が影響を与えたことを指摘している。第2章では石井明が、中国・インドの友好的な関係が国境問題を契機として破綻していった過程を叙述している。続く第II部では、冷戦終結後の世界が多極化していく中で三つの地域大国の動きの変化を、各国の外交戦略を中心に論じている。第3章の中居良文は、ロシアと比較しながら中国の冷戦終結期の動きを観察し、この時期の国内外の状況が中国の強大化に結びついたことを説明する。第4章の伊藤融は、経済自由化後のインドが、中国・ロシア・アメリカとそれぞれパートナーシップを取り結び、経済的・外交的に新たな関係を形成してきたことを説明する。第5章の兵頭慎治は、冷戦後のブーチン主導のロシアが、アメリカと中国・インドとそれぞれ関係を結ぶ中で、大国として復活しようとしてきたことを論じる。第III部では、各国の動きから目を転じ、ユーラシアの地政学をアメリカの存在を前提にしつつ論じている。第6章の小川伸一は、ユーラシアの核兵器秩序について論じ、中国を国際的な核管理プロセスに安全に迎え入れることが秩序の安定化につながることを主張する。第7章の片原栄一も、ア

メリカのユーラシア戦略を分析する中で、中国を単にリスクとしてとらえるだけではなく、ユーラシア秩序の中に安定的に包摂していくことが肝要であると論じている。

第6巻の『ユーラシア地域大国の文化表象』は、3国の文化をテーマとした巻であるが、先行する3巻と並べたとき性格を異にするものとなっている。先行3巻については、相互の関連が明確であり、また方法的にも比較の手法をとるのか関係の解明に重点を置くのか巻ごとに明示されているが、本巻ではこうした点が必ずしも明らかではなく「文化史・精神史の諸相を浮かび上がらせる」(18頁)と編者が述べるにとどめている。また、中国・ロシアとロシア・インドのそれぞれの関係は議論されているが、中国・インド関係は論じられずその理由は明らかにされていない。地域大国論として文化事象を論じる意義について、読者の側にその理解を大きく委ねるかたちになっている。これらの点については留意しつつ読む必要があろう。第I部では、文化表象の諸相として、音楽と映画についてのふたつの章が置かれる。第1章の井上貴子は、インドにおけるキリスト教音楽の受容と土着化の過程を、ロシアと中国における歴史を参照しつつ叙述し、比較研究の可能性を示している。第2章のS・V・シュリーニヴァースは、インド映画におけるアジア・イメージについて、個々の作品の読解を通じて論じている。第3章の高橋沙奈美・小林宏至・前島訓子は、ユネスコ世界遺産を軸に、各国における表象の政治学を検討しようとする興味深い共同研究で、今後のモデル化と比較分析が期待できる。第II部は、中国とロシアの相互認識と文化表象に注目しており、第3巻の国際関係論との連関は明らかである。南アジアは直接の考察の対象になっていないが、第3巻で中国・ロシア関係にインドの存在が冷戦初期より影響を与えたことが示されており、今後インドを考慮に入れた分析の可能性に期待できるだろう。第III部では、インドとロシアの間の思想的交流が描かれている。第7章の杉本良男は、マダム・ブラヴァツキーの神智協会と南アジアのナショナリズムの思想的関係を論じている。第8章の中村唯史は、ロシア出身の画家ニコライ・レーリヒのロシア観・インド観を読み解くことを通じて、ユーラシアの複数の場を結びつける世界観の可能性を示した。第9章の望月哲男は、トルストイからガンディーへの非暴力思想の影響を論じながら、近代国家の暴力に相対したときの共通の経験と世界観が存在したことを

描き出した。

以上、南アジア研究に関連が深い部分を中心に概観した。いずれの章も情報量豊かであり、またシリーズ全体としてユーラシアの地域大国という作業上の枠組みを設定したことによって、比較あるいは関係の視点が組み込まれる仕掛けになっており、研究手法上も学ぶところが大きかった。

最後に、評者が本シリーズを読むにあたって、若干困難に感じた点をあげておきたい。まず、国際関係をテーマとした第3巻の問題関心は、第6巻のテーマのひとつである文化表象・認識の問題につながるものであるが、必ずしも両者の関係が明らかにされていないように感じた。地域大国それぞれにおいて人口に膾炙していると想定される、国民を単位とした自己／他者表象と、現在の国際関係との関係について分析の余地が残されているように思う。またより一般的な論点として、文化的事象は経済や統治の制度に関する信念の形成に関係すると考えられるが、第6巻と他巻の議論との関連が必ずしも明らかではないとの印象を受けた。第1巻・第2巻で、ユーラシア地域大国の経済的・政治的発展の持続可能性を検討するという課題が強く打ち出されている一方で、第6巻ではその問題関心の共有の度合いが低い。これらの議論の連関を読み解くには、読者の側に相当の知識と洞察力が要求されるように思う。ただし、本シリーズには未刊の第4巻・第5巻があり、これらが政治・経済のテーマと文化のテーマを架橋するものであることが期待できるため刊行を待ちたい。